



キラめく道

想

夢

史

歴史



訓子府町の名は「クンネプ」というアイヌ語に由来しており、「黒いところ、やち川にして水黒し」の意味があります。ここは湿地で農業に適しているとは言い難い土地だったのです。  
しかし、高知県から入植した北光社移民団は、この北の大地に希望の光を求めて、開拓の二歩を踏み出しました。  
それから120年。先人たちが切り拓いた大地に根を下し、たくさん命をばぐくみ、人々の希望をつなぎながら発展していきました。  
訓子府の歴史を知ること、町の魅力を再確認しましょう。





# 大昔の人たちの 足跡を辿る。

訓子府町には太古の昔、人々の営みがあったことを示す遺跡があります。廃校となった旧緑丘小学校南側の「緑丘B遺跡」から黒曜石の石器などが発掘され、オロムシ沢入口にある「増田遺跡」からはホロカ型彫器などが発掘されました。いずれも旧石器時代の足跡を示す貴重な資料ですが、出土品から当時の様子は具体的に解明されていないものの、1万年以上も前から人々の暮らしがあったのです。

1858(安政5)年、江戸幕府より蝦夷地の地理調査を任命された松浦武四郎が、「アイヌの道案内により、現在の北見市常呂町、北見市端野町、北見市などを経て訓子府町の日出、大谷付近にたどり着いた」という内容が残されており、これが記録の中に訓子府が登場する最初の記述です。

た杉村某が、狩猟目的に日高地方のアイヌを雇ってクンネップ原野のオロムシ(現在の太谷)に滞在。数年後に帰郷しましたが、同行したアイヌ2世帯はそのまま残り、大谷地区と常呂川沿いに小屋を建て、鹿、熊、鮭などを獲る狩猟生活を続けました。このアイヌ2世帯が近代最初の定住者といわれています。



平村エレコーク  
明治19年~29年、オロムシに住んでいた平村エレコーク

1882(明治15)年、奈良県十津川村から来た原鉄次郎が、「釧路から馬17頭を引き連れて足寄から利別川を遡り、ケトナイ沢に出た。原野を焼き、鹿の角を集め、常呂川を下って網走に向かった」とされています。

1886(明治19)年、東京から来

## 遺跡



増田遺跡

1971(昭和46)年と翌年の2年間調査され約400㎡から細石刃、細石核、磨り石など、約1,700点の石器が出土しました。



緑丘B遺跡

1958(昭和33)年に64㎡の発掘調査が行われ、細石刃829点、彫器18点など約3,400点もの石器が出土しました。

# Roots ◆ 訓子府物語

記録の中に訓子府が登場するのは江戸時代の1858(安政5)年のことです。入植前は原始林が生い茂る未開の原野でした。1897(明治30)年、四国の土佐から北光社移民団が入植してきます。先人たちは、厳しい環境のもと、鋤を下ろし開拓を進めていきました。幾多の苦難を乗り越え、開拓から23年の1920(大正9)年、訓子府村として独立。54年後の1951(昭和26)年には、現在の訓子府町となりました。



北光社関係者



高知県浦戸港  
須崎港

## 長旅の果てに広がる未踏の原野

北光社移民団は、まず大地を覆う笹を刈り、大木を切り倒すことから作業を始めました。生活拠点は6坪ほどのあばら屋で風雪は容赦なく吹き込み、日々の食料にも事欠くほどで、野草や山菜で飢えをしのぎました。開墾が進むに連れて寒冷地でも比較的強い馬鈴しょ、ソバ、キャベツなどを栽培しましたが、入植した翌年の秋、大豪雨に襲われて、ほとんどの作物が濁流に飲み込まれてしまったのです。この大洪水を教訓に、1899(明治32)年クンネツプ川と常呂川沿いに上常呂までの排水路を造りました。

1900(明治33)年、訓子府尋常小学校(北見市上常呂)が開校して児童308人が就学、教育にも力が注がれました。また、道路網の進歩も目覚ましく、1906(明治39)年には交

通補助機関として、宿泊・人馬継立・郵便などの業務を行う施設・訓子府駅通が開設。野付牛から常呂川北岸を通る道路工事が行われ、2年後には置戸までの細い借り分け道路が完成しました。これが現在の街の中心を通る「道道北見置戸線」です。

1911(明治44)年に訓子府駅が開業し、翌1912(大正元)年には網走本線がついに開通し、急速な発展を遂げていきました。

一方、坂本直寛は移住後わずか数ヶ月で野付牛(現在の北見市)を去ってしまい、2代目の社長は澤本楠弥となりました。そして1914(大正3)年、北光社は黒田農場へ譲渡され、18年間にも及ぶ北光社の歴史に終止符が打たれたのです。



北光社本部跡地

# 北光社移民団の入植 北の大地に鋤を下ろす。

北海道に開拓使が置かれたのは1869(明治2)年のことでした。その20年後に北見地方の植民地選定調査が始まり、1891(明治24)年クンネツプ原野が植民地域に選定され区画調査を開始。原生林が生い茂る中、雨露は天幕でしのご、熊に怯え、ブヨや蚊に悩まされ、測量隊は次々と体調を崩していきました。そんな未踏の原野に希望を抱いて開拓のために入植したのが、坂本直寛らの北光社です。

北光社は、北海道(主に北見地方)の開拓を目的に、高知県内で自由民権運動を推進した土佐自由党のメンバーである片岡健吉、西原清東、澤本楠弥、傍土定治、大脇順若、坂本直寛らで組織した合資会社。1896(明治29)年8月、坂本直寛一行は視察したクンネツプ原野に可能性を見いだして開拓を決定しました。入植手続を進めながら移民規則を制定し、開拓移民を募集しました。そして翌年4月、高知県浦戸港から112戸(約650人)、須崎港から50戸(約150人)が高洋丸に乗り込み、北光社移民団は日本海を北上して北海道をめざしたのです。

高洋丸は給水のために小樽港に寄港



高洋丸  
長さ61.5m・幅8.8m・トン数727.67トン

し、稚内を周ってオホーツク海へ抜けました。船旅の途中、麻疹が伝播して多数亡くなり、宗谷岬を周ってからは流水やクジラに航路を阻まれ、何度か引き返して5月上旬ようやく網走港に入港することができました。1カ月ほどの船旅は、これからの開拓を暗示するかのごとく困難なものでした。

網走到着後、移民団の一行は2日間の休息後、各自重い荷物を背負い、北光社本部のあるクンネツプ原野へ歩いて向かいました。見渡す限りの原生林、道無き道をひたすら歩き続け、網走を出発して3日目の夕方、北光社本部に到着。本部といっても簡素な建物で、集会所、トイレ、風呂、厨舎などがある程度でした。

1897(明治30)年5月8日、北光社移民団のうち訓子府のオロムシ地区に入植したのは13戸(45人)で、その後、数戸の入替を経て14戸が訓子府の礎を築くため、長く険しい開拓をしていくことになるのです。それは南国土佐出身の開拓民にとっては想像を絶する自然との戦いの幕開けでもありません。



### 坂本 直寛

坂本直の実弟で龍馬の甥であり、坂本家5代目当主。1853(嘉永6)年10月5日生まれ。龍馬の宿願であった北海道開拓を引き継ぎ、1895(明治28)年、同志と共に合資会社北光社を設立して一家共々高知県から北海道に移住。その後、牧師となって軍隊や監獄での伝道活動や廃娯運動などに従事する。1911(明治44)年9月、病気のため札幌にて永眠、享年59歳。

#### 網走の越歳で一泊

砂浜に足をとられながら歩き、やがて越歳駅通所で一夜を過ごすこととなりました。駅通所は狭いため、馬小屋なども利用されたと言われています。

#### 端野でも一泊

越歳を出発した一行は、再び北光社本部をめざして歩き、やがて二日目の夜を端野駅通所で迎えました。

北光社本部で1日休息をとった後、5月8日、北光社移民団のうちの大谷清虎、馬場正吉ら13戸45人が訓子府地区に入植しました。

※駅通所(えきていじょ・えきていしよ)は北海道の開拓時代にできた施設(宿場)です。



叶橋工事

終戦の混乱が続く1947（昭和22）年5月3日に新憲法が施行され、衆議員・参議院議員選挙、知事選挙、市町村長選挙などが実施されました。戦後初代村長には農民の支持を得た谷本泰三郎が当選。村議会議員選挙では定員20人のところ新人14人が当選し、新しいまちづくりの第一歩がスタートしました。

敗戦という大きなダメージのもと食糧難は深刻で、暗い世相ではありませんが、次第に青年団や婦人団体の活動が活発になり、希望という光が差し込むようになりました。1949（昭和24）年7月、住民のスポーツ振興と向上をめざして体育連盟が結成され、第1回村民大運動会を開催。娯楽の少ない時代だったこともあり、この大運動会は大変盛況でした。



水田地帯

## 豊かな大地を礎にはぐくむまちづくり

道内各地にできた農業協同組合は苦しい経営状況でしたが、訓子府農協においては全村単一農協として発足したため、酸性土壌改良5カ年計画を推進して着実に業績を上げました。この土地改良によって、馬鈴しょ、タマネギ、ピートなどの収穫量は格段に増え、訓子府農業は回復の一途を辿ったのです。ところが村の財政は猛烈なインフレのあおりを受けて困窮を極め、道路や橋の拡張工事は滞りがちでした。

1951（昭和26）年、訓子府は「村」から「町」への昇格に向けて、さまざまな整備に着手しました。最初に手掛けたのは、老朽化して手狭になった役場庁舎など公共施設の整備。さらに小中学校の基礎工事、市街地の側溝や道路の改修、ゴミ焼却炉、街灯の設置など、生活に関わる環境整備も行われました。そして同年11月、訓子府村は「訓子府町」に生まれ変わったのです。

1953（昭和28）年、町内の各区域を整備。変電所の設置も決まり、長年電力不足で悩まされ続けた産業や人々の生活は近代化していきます。翌年には簡易水道が完成し、道立農試北見支場の誘致に成功。このころは凶作が続いて基幹産業である農業は停滞しましたが、農協による連絡協議会の発足によって諸問題の解決に取り組んだ



馬耕風景



ビート収穫

# 災害と復興を重ねて 訓子府村の幕が上がる

訓子府に薄荷（ハッカ）の苗が移入されたのが1902（明治35）年。需要が高くて高値で取引されたことから耕作農家が急増し、薄荷油精製も盛り上がりつつありました。1907（明治40）年には雑貨店が開店し、1年後には植林業、2年後には畜産業と産業が拡大。その数年後には、火力発電所から電気が引かれるようになりました。1919（大正8）年には現在、主要農産物となっているタマネギ栽培が開始されました。

しばらく穀物や薄荷の栽培は隆盛を誇りましたが、第一次世界大戦（1914～1918年）の終結によって輸出品だった穀物は暴落し、工場は相次いで撤退。軍需景気に沸いた地方経済は大きな打撃を受けました。さらに大豪雨や洪水などに見舞われて凶作も続き、住民たちは疲弊していったのです。北海道庁は穀物ブームで荒廃した畑にピートの作付けを奨励し、乳牛飼育農家に対する助成金制度を導入して農業の立て直しを図りました。そして訓子府は稲作へ転換していきます。1921（大正10）年、クネップ川流域、中ノ沢、翌年に現在の駒里と弥生の流域で造田



近代化する街並み

ことで活気をもたらしました。さらに工業や建設業といった二次産業も活況を呈し、訓子府の発展は加速していったのです。

1959（昭和34）年、商工会が設立。その後、隣接する北見市に大型百貨店がオープンし、地元商店街の売り上げは減少しましたが、地域活性化に取り組み、さまざまな地域密着イベントを通して町民との交流を深めています。

時は流れて元号は昭和から平成に変わり、21世紀を迎えました。時代の変化に伴い、行政も産業も大きく変化を遂げています。しかし、北光社が訓子府を開墾したフロンティア精神は今も変わらず受け継がれています。

が行われ、本格的な稲作への取り組みが始まりました。

訓子府は、1915（大正4）年4月野付牛村（現・北見市）から分村して置戸村となり、1920（大正9）年6月、1140戸（6592人）をもって訓子府は置戸村から分村独立を果たしました。初代村長は、野付牛で上席書記の職にあった山崎亮智。7月には村会議員の選挙も行われ、12人の議員が誕生しました。当時、議会で取り上げられた議題は、度重なる水害の復興策、経済恐慌による不況対策、農村振興、教育施設の充実、役場庁舎の建設などでした。

やがて元号は昭和へと変わります。冷害や水害などの災害に悩まされて順風満帆ではありませんでしたが、訓子府の人口は次第に増え、辛苦を越えながら産業は発展していきました。ところが、第二次世界大戦（1939～1945年）に突入すると、日本はもとより訓子府もその様相は一変します。青壮年の男子は次々と徴兵されて主要産業である農業生産は落ち込み、商店や小売業は転廃業に追い込まれ、村民の暮らしは厳しくなっていました。

## 懐かしい香り「薄荷」

在来式薄荷蒸留器は、木蓋をした蒸留槽で薄荷を蒸して、薄荷油を精製していました。木蓋が平らで蒸留に時間がかかりましたが、後に円錐型の蓋が取り付けられて蒸留時間の短縮につながりました。

くねっぶ歴史館では、当時訓子府の産業を支えたともいえる在来式薄荷蒸留器が展示されています。



## 訓子府の足跡

- 明治29年
  - ・北光社の初代社長坂本直寛、澤本楠弥、前田駒次らがクンネップ原野を視察
  - ・開拓の祖大谷清虎が、大工を連れ移民小屋を建設
- 明治30年
  - ・大谷清虎、馬場正吉ら13戸45人が本町オロムン地区に土地を開墾
- 明治33年
  - ・上常呂に訓子府尋常小学校を開校
- 明治35年
  - ・ハッカの栽培が始まる
- 明治39年
  - ・訓子府駅通開設
  - ・穂波、実郷で米を試作
- 明治41年
  - ・訓子府教育所を西24号に開設
- 明治42年
  - ・妻恋橋（現在の叶橋）完成
- 明治44年
  - ・訓子府駅開業
- 明治45年
  - ・訓子府郵便局設置
- 大正2年
  - ・訓子府巡査駐在所設置
- 大正3年
  - ・訓子府教育所が訓子府尋常小学校に昇格
- 大正4年
  - ・野付牛村（現北見市）から置戸村が分村し訓子府は置戸村に所属する
  - ・北訓教授場を開校

- 大正5年
  - ・公設の訓子府消防組設置
  - ・居士教授場開校
- 大正6年
  - ・訓子府商工組合設立
- 大正8年
  - ・タマネギの栽培が始まる
  - ・大水害で妻恋橋、大谷橋などが流出
- 大正9年
  - ・置戸村から分村し訓子府村が誕生
- 昭和元年
  - ・役場庁舎新築
- 昭和5年
  - ・訓子府市街の大火
- 昭和9年
  - ・妻恋橋を架け替えて「叶橋」に改称
- 昭和15年
  - ・訓子府商業組合設立
- 昭和22年
  - ・村長公選
  - ・初代村長に谷本泰三郎当選
- 昭和23年
  - ・北見北斗高等学校訓子府分校開校
  - ・訓子府村農業協同組合設立
- 昭和26年
  - ・役場庁舎、公民館建設
- 町制施行（11月1日）町章制定
  - ・谷本泰三郎が初代町長となる
- 昭和29年
  - ・道立農試北見支場の本町移転決定
- 昭和34年
  - ・訓子府町商工会を結成



空からみた訓子府市街(昭和41年)

- 昭和39年
  - ・ホクレン訓子府種畜改良牧場完成
- 昭和41年
  - ・開基70年、町制施行15周年式典
- 昭和42年
  - ・第二代町長に渡邊義夫当選
- 昭和43年
  - ・消防庁舎建設
- 昭和44年
  - ・共同利用模範牧場完成
- 昭和45年
  - ・開町50周年、町制施行20年記念式典
- 町民憲章制定
- 昭和47年
  - ・北見地区消防組合発足
- 昭和49年
  - ・中央公園完成
- 訓子府小学校統合校舎完成
- 昭和51年
  - ・訓子府高等学校が道立に移管

- 昭和52年
  - ・開基80周年記念式典
  - ・町花、町木の制定
- 昭和53年
  - ・スポーツセンター完成
- 昭和54年
  - ・第三代町長に佐藤忠義当選
- 昭和57年
  - ・公民館完成
- 昭和59年
  - ・図書館完成
- 昭和61年
  - ・開基90年記念式典
  - ・図書館貸出率日本一
  - ・農村環境改善センター建設
- 昭和63年
  - ・茨城県関城町（現筑西市）と教育姉妹町締結
- 平成元年
  - ・「ふるさと銀河線」開業
  - ・屋内ゲートボール場完成
- 平成2年
  - ・特別養護老人ホーム「くねっぶ静寿園」開園
- 平成3年
  - ・第四代町長に深見定雄当選
- 平成4年
  - ・市街地区下水道供用開始
- 平成5年
  - ・中学校新校舎建設
- 平成6年
  - ・日ノ出地区ふれあいセンター完成
- 平成7年
  - ・温水プール「KAPPA」オープン

- 平成8年
  - ・開基100年記念式典
  - ・叶橋完成
  - ・レクリエーション公園完成
- 平成9年
  - ・葬斎場「清陵苑」完成
  - ・末広地区農業集落排水供用開始
- 平成11年
  - ・日出地区農業集落排水供用開始
- 平成12年
  - ・ポケットパーク完成
  - ・農業交流センター
  - ・「くる・ネップ」オープン
- 平成13年
  - ・高知県東津野村（現津野町）と姉妹まち締結
- 役場庁舎、総合福祉センター「うらら」完成
- 平成14年
  - ・街並み整備事業全面完成
- 平成16年
  - ・くねっぶ歴史館オープン
- 平成18年
  - ・ふるさと銀河線廃線
- 平成19年
  - ・第五代町長に菊池一春当選
- 平成22年
  - ・子育て支援センターオープン
- 平成23年
  - ・町制施行60周年
- 平成25年
  - ・児童センターオープン
- 平成28年
  - ・認定こども園オープン
- 開基120年記念式典

## 時代を駆け抜けた、第三セクター鉄道

# 暮らしを灯した ふるさと銀河線

ふるさと銀河線は、道東の十勝管内池田町を起点とし、池北峠を越えて、終着駅がある北見市までの合計7市町を縦貫する総距離140kmの鉄道です。

もともと1911（明治44）年、道

央と網走を結ぶ幹線鉄道として開業しましたが、1987（昭和62）年の国鉄分割民営化に伴い、北海道旅客鉄道



（JR北海道）に承継されました。1989（平成元）年6月4日に北海道や沿線市町村、民間会社などが出資する第三セクター「北海道ちほく高原鉄道」に転換され、路線名も「ふるさと銀河線」に改称されたのです。

訓子府駅は開業した1911（明治44）年以来、地域の活性化に大きく貢献しました。それは、ふるさと銀河線になっても変わらず町民の暮らしを支え続けてくれたのです。2000（平成12）年には駅舎を改築して、農業交流センター「くる・ネップ」もでき、町内外の人々に親しまれていました。ちなみに、ふるさと銀河線に乗って星空のロマンを感じてもらおうと、一部の駅に星座名がつけられており、訓子府駅は「おとめ座」でした。

しかし、沿線の人口減少や車社会の浸透から、ふるさと銀河線の利用者は減少していきました。2006（平成18）年4月20日限りで廃止され、バス路線に転換。そして北海道の旧国鉄特



定地方交通線はすべて消滅しました。旧訓子府駅には、農業交流センター「くる・ネップ」があり、駅舎はバスターミナルの待合室や飲食店も併設され、コミュニティスペースとして活用されています。ふるさと銀河線は廃止となりましたが、形を変えて地域の暮らしを見守ってくれています。



## 全国初の 教育姉妹町茨城県関城町

1988（昭和63）年、訓子府町は茨城県関城町と全国初の教育姉妹町を締結しました。1974（昭和49）年に農業構造改善事業などを通して関城町との交流が始まり、両町の教育委員会が正式に教育姉妹町の締結へと発展。翌年から両町の小中学生がお互いの町を訪問するなど交流を深めました。2005（平成17）年、関城町の合併により教育姉妹町の交流は終了しましたが、いまも心の絆は残っており、旧関城町（現茨城県筑西市）の旧グリーンスポーツセンター前には、2008（平成20）年に建立された「交流記念の碑」があります。



交流記念の碑